



温故知新—Roy H. Doi先生を偲ぶ

2017年10月9日、カリフォルニア大学・デービス校（UCD）分子生物学 特別教授（Distinguished Professor）米国科学アカデミー会員Roy H. Doi先生がご家族に見守られる中、84歳で御逝去されました。ここに哀悼の意を表し、追悼文を寄稿させていただきます。Doi先生に初めてお会いしたのは1993年に開催された「Mie Bioforum」でした。その5年後に、Doi研のポスドクとして参加することになるとは想像もしていませんでした。

Doi先生は「コーン・スタンプ生化学」の著者のお一人でしたが、帰国後にこんなに著名な先生のもとで研究していたことを実感しました。枯草菌遺伝子発現制御、さらには*Clostridium*菌の結晶性セルロース分解研究でも世界的な業績をあげられ、この間に私を含め多くの日本人研究者を育てた偉業に敬意を表します。

（三重大学大学院生物資源学研究科 教授 田丸 浩）

Doi先生は、「学問に厳しく、人に優しい侍」です。日系2世として、収容所生活も含め多くの御苦勞をされながら、日本的な魂が、カリフォルニアの地で育まれていたように感じます。UCDでの40年に及ぶ教育・研究活動の間、多くの日本人研究者を受け入れ、その多くの方々が御活躍されていることを、誇りに思っておられました。お茶目な側面も見せてくださり、美味しい料理を召し上がられた後は、決まって「キラマケター」（忠臣蔵の「大石勝った（美味しかった）、吉良負けた。」）と嬉しそうに仰いました。憧れの女性は、映画「宮本武蔵（1954年）」でお通を演じた、八千草薫さんでした。「八千草薫さんを知っているか？」「知っていますよ！」「今も、綺麗か？」「お綺麗ですよ。」「じゃあ紹介してくれないか？」これが本気だったのか未だに謎ですが、会話の中に常に「古き良き日本」を感じました。「私の日本人の弟子は、みんな大活躍している。君も良い研究をするのですよ。」道半ばの私に、Doi先生の温かいお言葉が、耳に残ります。

（北陸先端科学技術大学院大学 教授／日本生物工学会 副会長 高木昌宏）

私淑させていただいていたDoi先生が天国に召されました。

細胞表層工学（アーミング技術）の論文を世界で初めて世に出してすぐ、ゴードン会議に招聘していただき、絶賛していただいたのが、昨日のように思い浮かべられました。多くの日本人の研究者を育てられた研究者として、また、「生化学」（東京化学同人）の共著者としての教育者として、「真の研究者」としてのお姿を畏敬の念で見えておりました。ゴードン会議からの帰朝の折から懇意の田丸浩先生と先生の微生物研究に参画させていただき、DOEとしてのぎを削ってほんの少しの差で、全ゲノム解析の共著論文と特許を獲得した際の、先生の研究推進への意欲と情熱とその懐の深さに感動いたしました。来洛された折には、嵐山・天龍寺散策の際、達磨絵に見入っておられた後ろ姿や、京料理を賞味していただいた際の笑顔をお忘れません。これまでの、私淑させていただいたことを、是非継承させていただきます。

（京都大学大学院農学研究科応用生命科学専攻 教授 植田充美）

40年前、米国MITにポスドクで滞在したとき、恩師のDemain先生の紹介でDoi先生に出会いました。当時の研究テーマの高温嫌気性細菌、*Clostridium thermocellum*のセルラーゼ生産、阪大に帰ってからの*Bacillus pumilus*のキシラナーゼ遺伝子のクローニングなどでDoi先生とカリフォルニアでの*Bacillus*会議などで親しくご指導いただきました。奈良先端大に赴任後、懇意になったUC DavisのRodriguez先生を窓口でUC Davisと奈良先端大の交流協定を2003年に結んだ際、Doi先生は親身に応援して下さり、2008年の奈良先端大グローバルCOE微生物科学ワークショップにも参加され感銘深い講演を頂きました。その年の3月、私の定年退職パーティーにわざわざお越しいただき祝辞を頂いたのが忘れられません。いつも穏やかで優しく直接の弟子のようにご指導を頂きました。改めて厚くお礼申し上げます。訃報に接し、ご冥福をお祈りします。

（奈良先端科学技術大学院大学 名誉教授・特任教授／日本生物工学会 元会長 新名淳彦）